生涯教育とライフワーク

札幌市医師会

青木　功喜

はじめに

20年前に青木眼科を閉院したにもかかわらず、北海道医報の原稿依頼は会員として光栄です。深謝し筆を執ります。

私は38歳の時に12年間お世話になった北大眼科を辞任して白石区本通５丁目に開業しました。２丁目には三代目北海道医師会長の吉田信先生が内科を開業しておられました。開業後間もなく吉田先生と武田俊男先生に勧められて札幌東ロータリークラブ（RC）に入会し、以後40年間ロータリアンとして職業奉仕と国際奉仕活動を続けております。我が家は親兄弟５人皆医師であったので、存在感のある開業医になりたいと思っておりました。８丁目の笠原正秀先生にはRC例会後、毎週帰る道すがらご子息の笠原正典先生（現北大副学長）の成長を聞き、自分なりに開業生活を続けることができました。

修業時代

北大眼科医局当時はred eye clinicの感染症の時代で二代目藤山英寿教授のもとトラコーマのティーテルアルバイトを終え、三代目の杉浦清治教授のご配慮でローマ大学（イタリア）および欧米の眼科にも留学できました。開業後は患者診療とともに、内外の大学で研修したことを開業後も続けたいと、北大公衆衛生学教室の石井慶蔵教授と湿度の高い日本と東南アジアに多いアデノウイルス（HAdV）による流行性角結膜炎（EKC）の研究を、台湾・高雄、韓国・釜山、フィリピン・マニラのEKC患者のHAdV分離同定の年次推移をまとめ、「Int. J. Epidermiol 16:68-108」に「Comparative studies on aetiology and epidemiology of viral conjunctivitis in three countries of east Asia-Japan, Taiwan and South Korea」として報告でき、46歳の時に日本医師会最高優功賞を頂き、以後私の生涯教育が始まりました。

生涯教育

授賞式ではあの眼光鋭い目で十一代目武見太郎日本医師会会長から福沢諭吉訓の「世の中で一番楽しく立派なことは一生涯貫く仕事を持つことであり、開業医として立派に研究をやり遂げなさい」と言われました。また恩師の杉浦清治先生が日本眼科学会宿題報告のため収集したHAdVの株を北大の大学紛争ですべて失った際の悲しそうな顔が脳裏に焼き付き、修業時代にソーク研究所を訪れた際にジョナス・ソーク博士に直接聞いた言葉「成功するかどうかは、その人の能力よりも情熱に負うところの方がはるかに大きい。自分の仕事に身も心も捧げる人こそ、勝利者になるのだ。失敗などと言うものはない。単に早く諦めたに過ぎないのだ」という３人の教訓が40年間の生涯教育の支えとなりました。

Epidemic Keratoconjunctivitisと感染症サーベイランス

44歳から始まった感染症サーベイランス事業には日本眼科医会を代表して厚生省解析委員として参画し、横浜市大と北大大学院情報科学科Bioinformatics講座（渡邉日出海教授）でEKCの新しい病原体53、54および56型の新型を発見できたのは北大眼科五代目大野重昭教授のご理解とご協力の賜物で、国際アデノウイルス学会で承認されたのは、還暦も過ぎた2008年の時でした。しかし開業医生活のもとでの研究では世界の競争にはついて行けず、65歳で開業を辞めました。

ライフワーク

しかし六代目の石田晋教授のご好意により2009年74歳で客員研究員として研究の機会が与えられ、2011年NIHの“ゲノムによるアデノウイルスの分類と命名の基準Workshop”では、北海道医療大の北市伸義教授とEKC株の総括をすることができました。2013年には日本眼科学会雑誌117:721-726に総説「院内感染起こす新型HAdVのBioinformatics」を、本年は「Journal of Clinical Virology 112: 1-9」にReview「Challenges in management of Epidemic Keratoconjunctivitis with emerging recombinant human adenoviruses」をopen accessでき、私のライフワークもまもなく終わりを迎えます。

おわりに

この60年間、初心を忘れずに生涯学習の精神を保ち、medical scientistの責任を自覚し、医療の公共性を重んじ、医療を受ける人々への還元と医学の進歩と発展に微力を尽くせたことを、お世話になった内外の研究者の皆様に感謝し筆をおきます。